

# 東京都の方言分布

木川行央・沖 裕子・杉本 武  
石井直子・河崎裕子

本稿は、東京都における方言分布の例を、老年層・若年層のそれぞれについて報告し、簡単な考察を加えるものである。ここにとりあげた項目は、いわば中間発表としてのものであり、量的にも全体のごく一部である。ここで発表する地図は、次に述べるような経緯を経て調査が進み、言語地図となった。

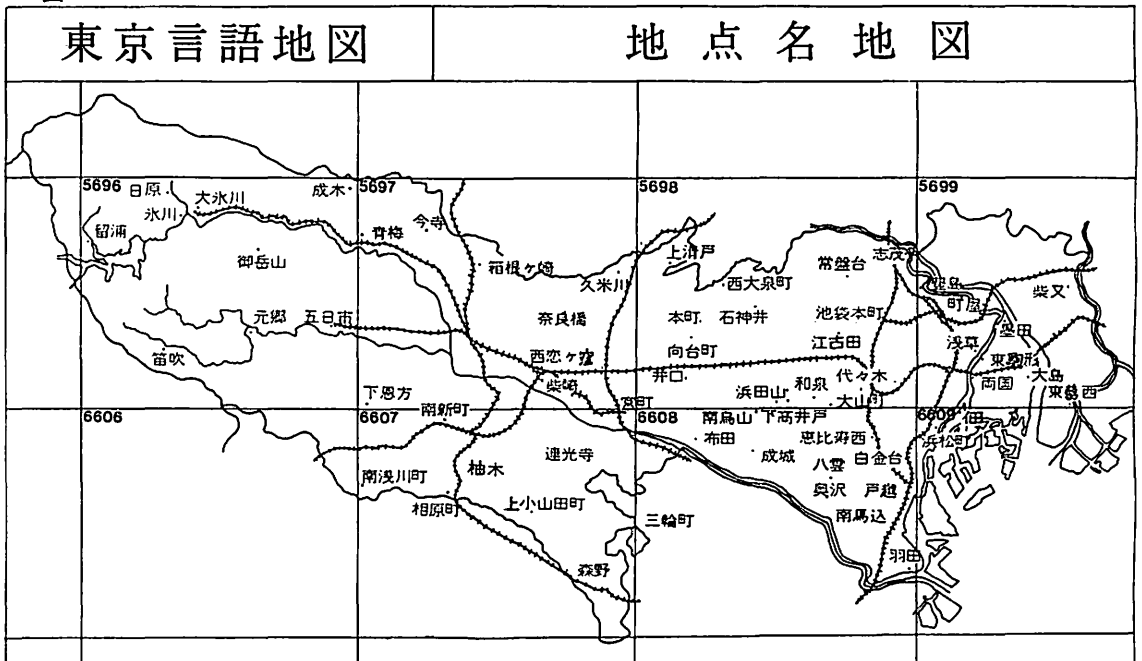
東京都23区以外を中心にした第一次調査がまず行われ、それを引き継いで23区内の第二次調査が行われた。第一次調査は、1981年5月から6月にかけて、国際基督教大学（I.C.U.）の有志が調査した。その時の調査項目は語彙を中心にした50項目で、調査地点は35地点、調査者は19人であった。その後、東京都立大学の有志が1981年11月から12月にかけて、東京都23区内の調査を引き継いだ。この第二次調査では、I.C.U.の

調査項目のうち、地域差の出なかった4項目を抜き、語彙・場面差など21項目を新たに加え、さらにアクセント68項目を加えた。この時の調査地点は20地点、調査者は12人であった。今回の発表は、これらの調査資料から、数項目を選んで作図し、発表するものである。原稿は、地図作成者がそれぞれの項目の考察を提出し、それを木川と沖が目を通して加筆した。

これらの調査は、東京外国語大学の井上史雄先生の授業出席者から有志が集って行われたもので、二つの調査が相続けて行われ、こうしてひとつの言調地図にまとめて報告することができるのも、井上先生の御指導に負っている。記して感謝申し上げます。

なお、調査地点、話者及び調査者は次の通りである。御協力下さいました話者の皆様に感謝申し上げます。

図1



地点番号	地点名	話者氏名	生年月日	性別	職業	地点番号	地点名	話者氏名	生年月日	性別	職業
5696-04	日原	山崎憲一郎	(86才)	男		5699-40	豊島	鈴木正三	T 3. 7. 13	男	米屋
" "	"	黒沢秀夫	S 40. 9. 12	男		" -45	柴又	戸塚太右衛門	M 39. 8. 10	男	農 業
5696-09	成木	萩原萬治	M 30. 6. 4	男	農・林業	" "	"	桜井靖志	S 41. 3. 3	男	高校生
" "	"	加藤晴裕	S 42. 6. 30	男	中学生	" -51	町屋	西川貫治	T 4. 11. 20	男	
" -14	水川	原島茂幸	S 42. 3. 13	男	中学生	" "	"	安達尊男	S 42. 3. 14	男	中学生
" -15	大氷川	浅見孫三郎	M 25. 9. 23	男	大工	" -62	墨田	小山大郎	M 40. 5. 14	男	植木職
" -20	留浦	河村 豊	T 3. 3. 17	男	農 業	" "	"	勝田俊夫	S 40. 2. 11	男	高校生
" "	"	清水正人	S 43. 6. 26	男	中学生	" -71	浅草	二宮英雄	T 9. 9. 16	男	飲食店
" -36	御岳山	秋山文一	T 2. 11. 24	男		" "	"	飯村 勉	S 39. 11. 5	男	高校生
" "	"	高名英樹	S 37. 5. 17	女	専門学校学生	" -72	東駒形	清水栄次郎	M 36. 11. 8	男	皮 屋
" -66	元郷	播野才秀	(73才)	男		" "	"	清水伴子	S 42. 1. 27	女	中学生
" "	"	高取英代	(14才)	女	中学生	" -81	尚園	金子喜八	T 5. 12. 2	男	とび職
" -69	五日市	栗住野林之助	(78才)	男		5699-83	大島	岩崎留次郎	M 33. 12. 5	男	農 業
" "	"	森谷有紀子	S 43. 2. 3	女	中学生	" "	"	岩崎正照	S 43. 5. 16	男	中学生
" -83	笛吹	坂本正雄	M 39. 5. 1	男		" -95	東葛西	彦田昌英	T 14. 10. 22	男	
" "	"	坂本英智宏	S 42. 3. 14	男	中学生	" "	"	彦田加世子	S 38. 6. 20	女	高校生
5697-20	背梅	内田キヨ	T 4. 6. 15	女		6607-03	南新町	渡辺ミツ	T 4. 1. 15		
" "	"	久保将浩	S 44. 3. 3	男	中学生	" "	"	治武義明	S 43. 1. 17	男	中学生
" -22	今寺	加藤マサ	T 8. 2. 3	女		" "	"	荒井伊左久	S 42. 8. 6		中学生
" "	"	滝沢成光	S 42. 1. 12	男	中学生	" -09	宮町	相沢よね	M 44. 1. 12	女	
" -34	箱根ヶ崎	村野 彦	T 6. 6. 16	男		" "	"	相原凉子	S 43. 9. 29	女	中学生
" "	"	村野善吉	M 40. 12. 11	男		" -18	蓮光寺	萩原高博	M 32. 7. 24	男	
" "	"	村野良英	S 42. 8. 30		中学生	" "	"	萩原 賢	S 41. 4. 8	男	中学生
" -49	久米川	吉野文治郎	T 3. 10. 27	男		" -25	柚木	内田ノブ	T 5. 12		
" "	"	金子正時	S 41. 1. 11	男	高校生	" "	"	伊藤裕之	S 42. 9. 12	男	中学生
" -57	奈良橋	岸 吳鏡	T 6. 9. 1	男		" -30	南浅川町	栗原勇治	M 43. 3. 21	男	
" "	"	成田新吾	S 42. 3. 11	男	中学生	" "	"	柴崎敏明	S 43. 3. 20	男	
" -86	柴崎	石川安一	M 41. 1. 1	男		" -33	相原町	井上久吉	M 44. 11. 20	男	
" "	"	石川一行	S 42. 6. 3	男	中学生	" "	"	尾崎高広	S 43. 4. 28	男	中学生
" -88	西恋ヶ窪	尾崎角太郎	M 33. 11. 20	男		" -46	上小山田町	森 和儀	M 43. 11. 11	男	
" "	"	坂本 誠	S 41. 7. 20	男	中学生	" "	"	三谷浩幸	S 41. 6. 3	男	中学生
" -90	下思方	秋山フデ	T 1. 12. 1		材木商	" -59	三輪町	荻野省二	M 34. 11. 13	男	
" "	"	橋本 篤	(13才)	男	中学生	" "	"	田中 均	S 42. 5. 26	男	中学生
5698-31	上清戸	齋藤米蔵	M 29. 3. 8	男	農 業	" -77	森野	渋谷隆泰	T 6. 6. 15	男	教 員
" "	"	村野彰紀	S 42. 10. 27		中学生	" "	"	五十子良平	S 42. 8. 2	男	中学生
" -39	志茂	富田義一	M 34. 1. 19	男	無 職	6608-05	南島山	上田 正	T 2. 1. 16	男	
" "	"	富田康紀	S 41. 2. 11	男	高校生	" -12	布田	石井澄彦	T 3. 10. 29	男	
" -42	西大泉町	工藤大蔵	S 38. 3. 11	男		" "	"	山口清隆	S 41. 12. 1	男	中学生
" -47	常盤台	小野沢卯之吉	M 36. 11. 6	男	農 業	" -14	成城	吉岡兵太郎	T 7. 12. 8	男	会社員
" "	"	小野沢政夫	S 39. 3. 18	男	高校生	" "	"	中島 修	S 44. 3. 26	男	中学生
" -54	石神井	八室秀子	T 3. 8. 15	女		" -18	恵比寿西	白井 爽	T 7. 6. 14	男	会社員
" -58	池袋本町	松本雄一	S 41. 10. 27	男	中学生	" "	"	大塚智子	S 43. 8. 26	女	中学生
" -61	向台町	栗島利作	M 38. 11. 15	男	農 業	" -29	白金台	星川大輔	M 42. 9. 2	男	製造業
" -62	本町	山崎雄一	S 42. 11. 18	男	中学生	" -36	八雲	浦村新太郎	M 23. 9. 30	男	大工
" -67	江古田	堀野今吉	M 37. 4. 27	男	無 職	" "	"	渡辺武志	S 40. 7. 7	男	高校生
" "	"	沢渡 直	S 37. 12. 16	男	高校生	" -36	奥沢	毛利憲太郎	M 42. 12. 12	男	教 員
" -81	井口	竹内藤一	T 3. 11. 12	男	無 職	" "	"	松川兼介	S 41. 11. 26	男	中学生
" "	"	小林正人	S 42. 5. 29	男	中学生	" -38	戸越	秋山国蔵	M 43. 8. 1	男	
" -94	下高井戸	前田智雄	S 41. 11. 9	男	中学生	" "	"	中川知之	S 38. 7. 31	男	高校生
" -95	"	荒川利太郎	M 43. 7. 6	男	水道工事	" -48	南馬込	吉川幸二郎	S 42. 3. 3	男	中学生
" "	"	荒川利江	S 38. 8. 5	女	高校生	" -79	羽田	守屋秀吉	T 5. 3. 14	男	会社員
" "	浜田山	安藤菊三	T 10. 2. 13	男	魚 屋	" "	"	関口一雄	S 37. 12. 20	男	高校生
" -96	和泉	坂口正信	T 1. 11. 29	男	農 業	6609-00	浜松町	井坂広一	T 3. 12. 3	男	洋服屋
" -97	代々木	元沢常蔵	M 36. 9. 5	男		" "	"	鈴木正夫	S 40. 9. 29	男	高校生
" "	大山町	小沼 誠	S 42. 11. 13	男	中学生	" -01	佃	中瀬 弘	T 5. 9. 10	男	漁 師
" "	"	"	"	"	"	" "	"	折本昭一	S 39. 1. 1	男	中学生

1. ひきがえる

まず老年層をみると、東部ではガマ類（オカマガエルも含む）が、西部ではオーヒキ類（オシキガエルも含む）が多く、不明瞭ながら東西対立を示している。これは、『日本語地図』（以下、LAJと略）、『関東地方方言事象分布地図』（以下、DAKと略）などから明らかであるような、房総半島を除く東関東のガ

マ類、西関東のオーヒキ類という東西対立を反映しているものと考えられる。

そこで、まず、このガマ類とオーヒキ類についてみてみたい。オーヒキガエルについては、既にLAJ解説で述べられているように、関東地方にも古く「かえる」の総称としてのヒキが存在し、これと「ひきがえる」とを区別するためにオーヒキという形式が生まれ

図2

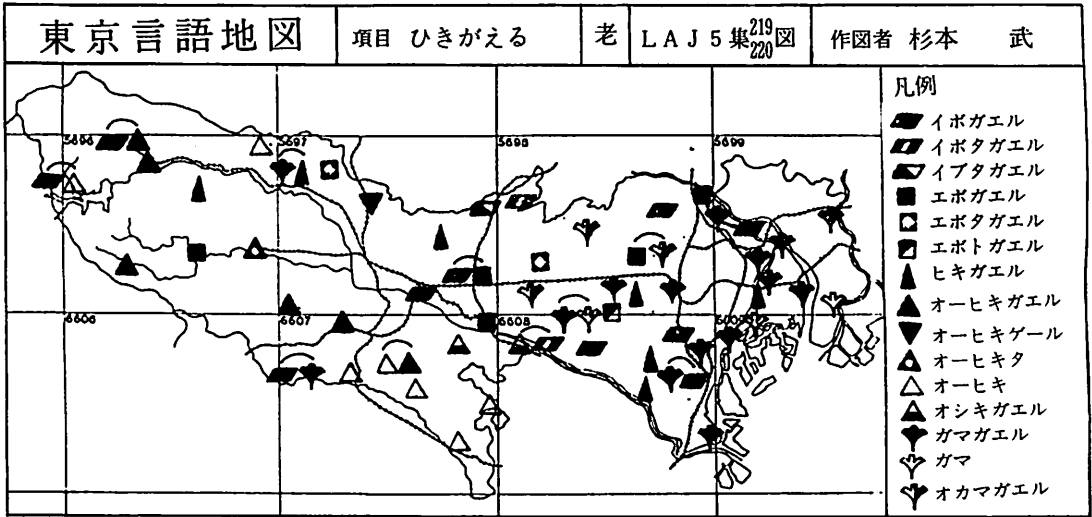
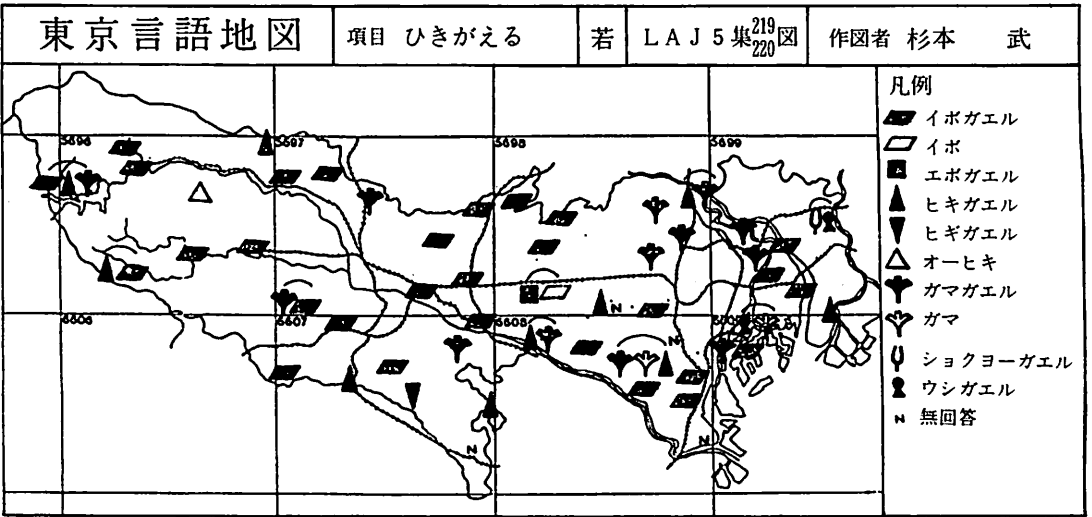


図3



た。そして、中央から「かえる」の総称としてカエルという形式が伝播してきた後も、オーヒキ（ガエル）の形で残存しているものと考えられる。一方、ガマ類は、オーヒキよりも前に存在していたとすると、「ひきがえる」を「かえる」と区別するためにヒキからオーヒキという形式を生み出す必要はないので、オーヒキ

よりも新しい形式であると推測される。ところが、ガマ類は、東関東（および東北南部）のみならず、全国に散在し、九州にもオーガマ、オカマドンクの形で存在する。このことから、ガマ類が古い形式であることも推測できる。確かに、ガマ類は東関東、東北南部に集中しているので、この地域内でオーヒキよりも後

に発生したとも考えられるが、そのように考えると、全国に散在することを説明しにくくなってしまふ。この点については、今のところ何とも言えない。

ところで、ガマ類のうちオカマガエルであるが、このオが何であるかは明らかではない。あるいはオー(大)であるのかもしれないが、オーガマ〜という形式は福岡県に1地点みられるのみであるので、疑わしい。したがって、LAJ解説にも述べられているように、オーヒキ類のオーとの関連も不明である。また、オーヒキタのタが何であるかも不明である。これは、イボ類のイボタガエル、イブタガエル、エボタガエル、エボトガエルのタ、トと関連があるのかもしれない。

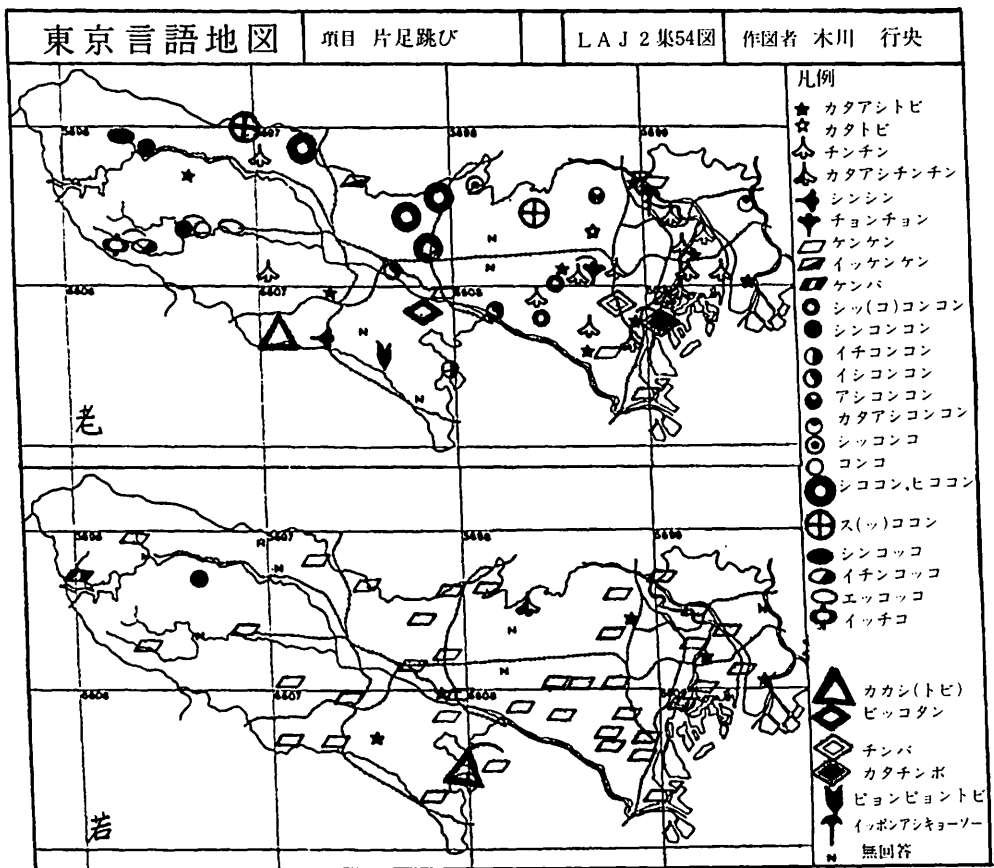
次に、ヒキガエルは東京都東部、および西部の鉄道沿いにみられる。これは、LAJによると関西を中心に分布し、現在では共通語形とみられる。これは、「かえる」の総称としてのヒキの残存というよりも、共通語形として新たにひろがったものであろう。

また、東京都中部を中心として全域にみられるイボ

類は、LAJによると、関東を中心として散見される他、イボドンク、イボワクドの形で九州に数地点みられる。これは、「ひきがえる」の皮膚の特徴に注目した命名で、各地で独自に発生したものではないかと思われる。

次に若年層をみてみよう。若年層では、東京都東部にはガマ類が残るとはいうものの、圧倒的にイボ類が多くなり、共通語形とみられるヒキガエルもそれほど広がっていない。この現象は、共通語形がそれほど広がっていないという点で興味深い。若年層においては、「ひきがえる」はあまり身近な存在ではなく、見たことがない話者も多いのではないと思われる(無回答も4地点ある)。そのような場合、方言形を知らずに、共通語形を回答することが予想される。ところが、実際には、共通語形であるヒキガエルではなく、方言形であるイボ類を回答しているのである。この点をどう解釈すべきかは問題として残る。

図4



## 2. 片足跳び

この項目に対して、老年層では数多くの語形が集まった。無回答の4地点を除く52地点で得られた回答のべ語数は58であるが、その異なり語数は32にのぼる。しかも、チンチンという回答が14地点で得られているので、その他の語形それぞれの分布する地域はごく限られているということになる。しかし、その多くの語形もいくつかのグループにわけることができる。

まず、チンチンから見ていく。この語は山の手線周辺を中心とする都心、さらに青梅や下恩方などにも分布する。また、シンシン・チョンチョンもこの類に含めて考えられよう。

これに対し、23区外そして23区内でも周辺に位置するコンコン系とでもまとめられるような語形は後部の形によって4つにわけて考えられる。すなわち、一・コンコン、一・コンコ、一・ココン、一・コッコである。このうち、一・コンコンの形は全域に散在している。そして、そのうち、23区内でも北にある常盤台や柴又には、(カタ)アシコンコン(柴又の話者によれば、両足でとぶのがアシコンコンであり、これは片足でとぶからカタアシコンコンであるという)が分布し、世田谷区ではシッ(コ)コンコンが分布する。また、中部の布田、柴崎、三輪町にはイチコンコンあるいはイシコンコンが分布し、西部の大氷川、元郷にはシンコンコンが分布するというように、ある程度のまとまりがみられる。

一・コンコの形があらわれるのは元郷と上沼戸の2地点であり、地理的にも連続しておらず、さほど勢力のあるものとも考えられない。(なお、DAKによれば奥多摩町下境にシンコンコの形がみえる)

それに対し、一・ココンの形は中央線および青梅線の北にまとまった分布をみせている。

また、一・コッコの形は日原と五日市、笛吹の3地点のみにみられるが、奥多摩地方である程度の勢力をもっているものとみられる。

一方、前部の形についてみてみると、一・コンコンの分布のところで述べたもの以外は、ほぼ後部の形の分布する地域と一致する。ただ、シン・一、シッ・一、シ・一をひとまとめにできるとすれば、西部から中部にかけての広い地域に分布しているといえる。また、イチ・一、イシ・一は神奈川県境に近い南部の地域に散在している。これらの状況は、DAKの資料を加えて考えても同じ姿になる。

参考までに、隣接地域の分布状況のみておこう。まず、DAKによれば、埼玉県入間市にシココン、神奈

川県相模原市、横浜市北区にイチコンコがみられ、それぞれ隣接する東京都内の分布と一致している。また、LAJによっても、東京・埼玉・千葉三都県の県境付近にアシコンコンが、東京・埼玉県境付近にスココンがみられる。

以上の他に、カタアシトビとケンケンがある程度の地点数をもつが、まとまった分布はみせていない。したがって、上記の2つの系統の語が東京のほぼ全域をおおっていると考えられる。

さて、2つの系統の新古は、その分布からチンチンの方が新しいと考えられる。しかし、コンコン系の中での新古をとうことは、現状ではむずかしい。後部の形については、最も西にまで分布しているという点からは、一・コンコンあるいは一・コッコが最も古いとも考えられる。また、前部の形では、シではじまる形が最も古く、その後何らかの影響(たとえば他の語形あるいは動作からの連想)によって、イチ・一あるいはアシ・一の形が生じたとも考えられる。そして、それぞれの地域で後部が変化し、前部もまた後部と同時にあるいは少しずれて変化したのかもしれない。しかし、これも想像であり、今それを裏づけることはできず、また全国的にみて妥当であるかどうかははっきりしない。

さて、その他の語形を簡単にみていく。まず、ビッコタン、チンバについては跛行を表す語と関連づけられよう。また、カタチンボも同様に考えられるのではなかろうか。カカシトビは、老年層では1地点にしかあらわれないが、若年層にも1地点少しはなれた地点にカカシがあらわれる。あるいは、この付近にまとまった分布を示すものかもしれない。

さて、若年層であるが、老年層のように多くの語形はあらわれない。無回答7地点をのぞく47の回答のうち異なり語数は7であり、そのうちケンケンが38地点であがっている。その他ではカタアシトビが4地点にみえる以外は1地点ずつの回答である。その中で、老年層にもみられる形としてはシンコンコンがあり、チンチンの系統のカタアシチンチン、上に述べたカカシもみられる。また、カタアシは、カタアシトビからの変化、ケンバはケンケンからの変化(あるいは片足跳びを使った遊びの名か)と考えられる。

とにかく、若年層では、老年層においてまとまった分布をみせなかったケンケンが、ほぼ全域をおおっている。この語形は、近畿地方を中心に分布する語形であり、もともと東京周辺においては地理的な背景をもたないものである。そのような語形が急速に広まった点が興味深い。

### 3. かまきり

老人層では、ほぼ全域にわたりカマキリが分布し、さらに中・西部を中心にトカゲ(トカゲであるかトカゲであるかの区別は、ここではしない。他の語形についても同様。)が散在している。その他には、ドクムシ、トーロー、ハラタチゴンペー、ゴンペーがそれぞれ1地点ずつ(ハラタチゴンペーとゴンペーは同じ地

点で併用)みえる。

トカゲは、特にまとまった分布を示すとはいえない。しかし、LAJやDAKなども参考にすると、都の中・西部に広く分布していたものと考えられる。

柴又にみられるハラタチゴンペー、ゴンペーは、LAJなどによれば埼玉県の一部などに連続するものであり、さらに千葉県にみられるハラタチゲンペー、

図5

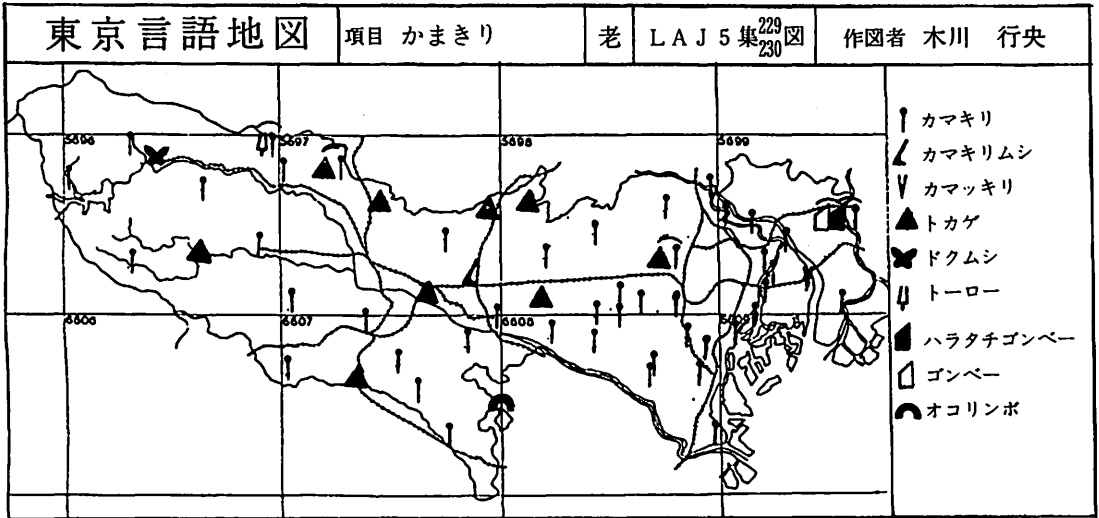
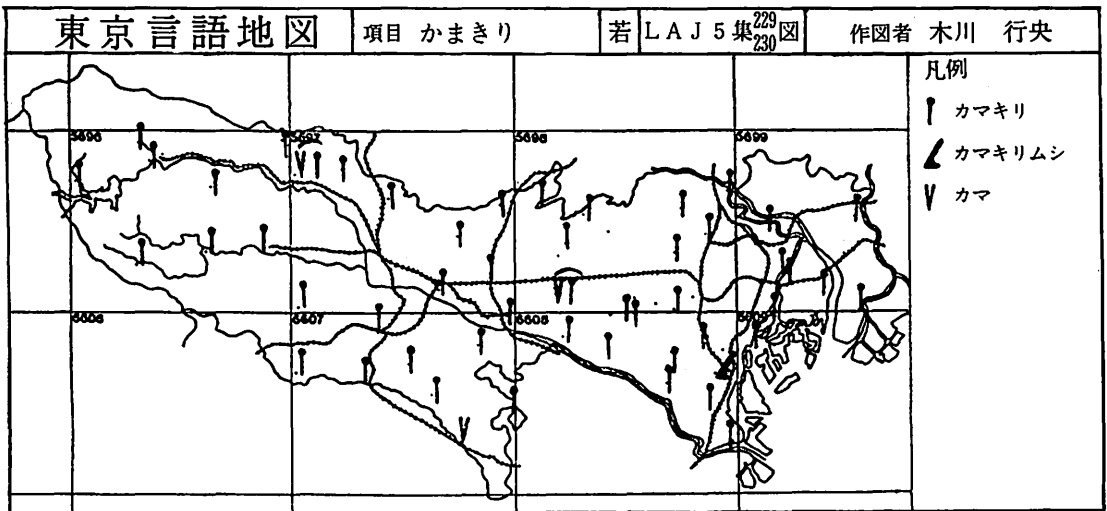


図6



ハラタチゲンゴなどとの関連も考えられる。

三輪町にみられるオコリンボーは、ハラタチゴンペーなどと似た発想の語と考えられるが、LAJ、『神奈川県言語地図』では、三輪町周辺にもみあたらない。なお、DAKによれば、千葉県安房郡白浜町にオコリンボが、埼玉県秩父郡大滝村にオコリムシがあるが、直接的な

影響関係はなからう。

成木のトーローは、一般的には漢語的表現と考えられる。しかし、LAJによれば、埼玉・群馬・栃木にややまとまった分布をみせており、成木のトーローもそれに連なるものかもしれない。

大氷川にあるドクムシは、LAJによれば埼玉県入

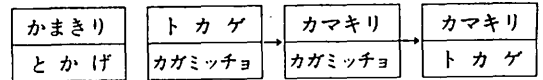
間郡名栗村にもみられる。距離的にはそれほど速くはないが、関係づけられるものかどうかは、はっきりしない。

以上の分布から、東京における「かまきり」をあらわす語の大きな流れは、古くトカゲといていたところにカマキリが新しく広がりつつあるということができよう。

さて、関東地方においては、「かまきり」と「とかげ」の関係が問題となる。今回の調査においてもトカゲという語があらわれているが、「とかげ」あるいは「かなへび」を調査項目としてとり入れたのが都立大調査の時点からのため、「とかげ」「かなへび」の分布状況を地図化して示すことはできない。しかし、都立大調査およびICU調査の情報、さらにLAJやDAKを参考にすると、都心を除く広い地域では、「とかげ」「とかげ」と「かなへび」を区別する地点もわずかながあるが、一応ここでは「とかげ」だけをとりあげる）に対してカガミッコを用いる。すなわち、都心においてはカマキリ／トカゲ（前が「かまきり」後が「とかげ」）をあらわす。以下同様。）、都心の周辺にカマキリ／カガミッコの地点があり、中・西部ではトカゲ／カガミッコとなっている。このような分布にまじって、豊島のようにカマキリ／カマキリと同じ語形を用

いる地点もあらわれている。同様な現象はDAKでもみられ、新宿区柏木ではカマキリ／トカゲ・カマキリ、八王子市宇津木町ではカマキリ・トカゲ／ハガミッコ・カマキリとなっている。

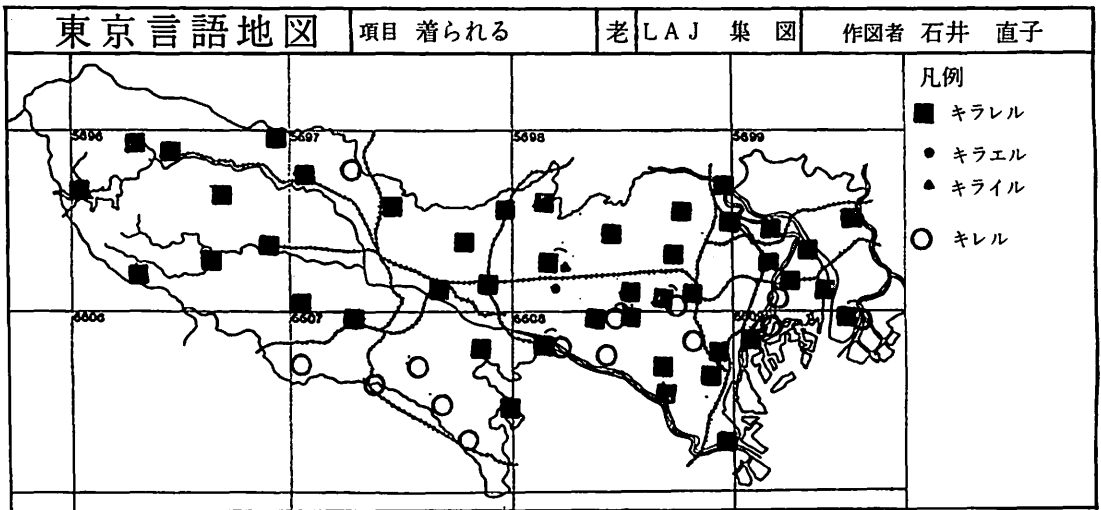
両者の関係の大きな流れは、さきに述べた分布状況から、次のように考えられる。



しかし上のように考えても、LAJ解説のように東日本におけるトカゲを西日本からの輸入とするならば、トカゲがなぜ「かまきり」を表す語として定着したか、豊島のように両者をカマキリというのはどの時点に生じたのかなど、問題は残る。

一方、若年層の分布をみると、ハラタチゴンペーなど一地点ずつみられた語の他、トカゲもなくなり、ほぼカマキリが全体をおおっている。そして、老年層ではみられないカマが3地点にあらわれている。これは、分布する地点がかなり離れているので、直接的な関係は考えにくい。それぞれの地点で独自に発生したものであろうか。今後どのようになっていくか興味のあるところである。

図7



#### 4. 着られる・食べられる

一段活用動詞の可能表現である。現在のところ、一段活用の動詞は「ラレル」を接続して可能を表し、キレル・タベレルなどは共通語とは認められないとされている。

今回の調査結果で年齢による違いを見ると、あきら

かに「～ラレル」形にかわり「～レル」形が浸透してきているのがわかる。「食べられる」で見ると、西大泉町の若いインフォーマントはタベラレル形を用いているが、本人はタベレルの方が正しい語形と思っているという報告があるほどである。ところが、神奈川県に近い森野・上小山田町・宮町の三地点では、老年層で

タペレルが用いられ、若年層でタペラレルであるとなっており、全体の傾向と食い違う。これは、この地域のもともとの語形はタペレルであり、若年層に見られるタペラレルは共通語化によって入ってきたものかとも想像される。したがって、この地域でもやがて再びタペレルが用いられるようになるのではなからうか。

次に地域的な差を見ると、老年層では、だいたい神奈川県に近い南部に「～レル」形が分布している。若

年層でもやはり北の方に「～ラレル」形がいくらか多く残っているようだが、はっきり指摘できるほどではない。

また、「食べられる」と「着られる」を比較すると、「着る」の方が「～レル」形になりやすいようである。もっとも、「食べられる」では「食う」を用いたクエルなどの形がかなり出ているため、一概に決めることはできないだろう。

図8

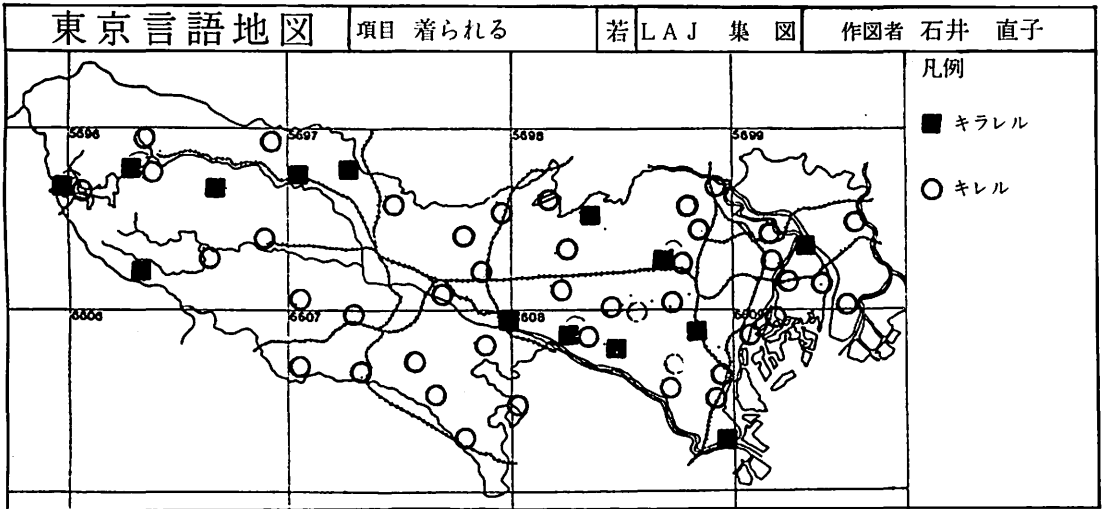


図9

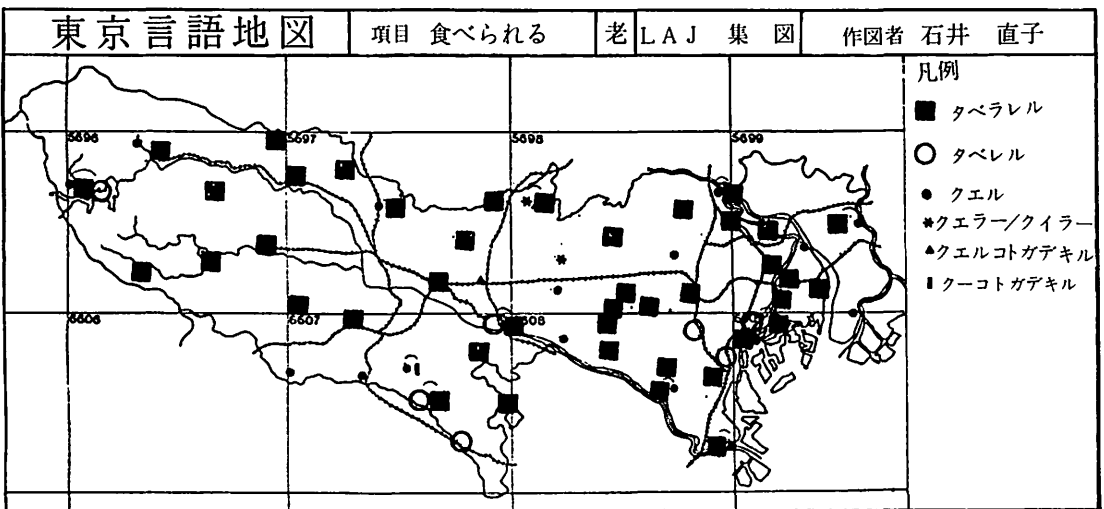
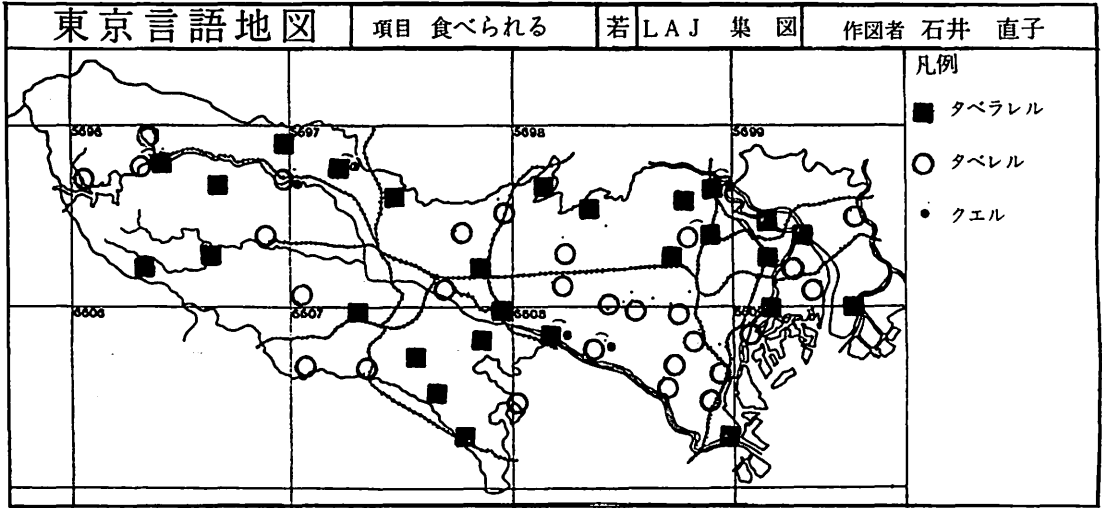




図10



5. あさっての翌日・あさっての翌々日

地図は計4枚にまとめた。老年層では、「あさっての翌日」「あさっての翌々日」それぞれの地図を描き、更に、この2項目を重ね合わせた地図1枚を加えた。若年層は、分布が比較的単純であったため、2項目を重ね合わせた地図のみを示した。(以後、「あさっての翌日」を「翌日」、「あさっての翌々日」を「翌々日」と略す)。「翌日」「翌々日」それぞれで得られた語形を簡単に紹介し、2項目を重ね合わせた地図を老年層・若年層で比較して、その変遷をたどりたい。

まず、老年層であるが、図11、図12では、語形はすべてそのままの形で地図に書き込んである。(ただし、ミッカメ、ヨッカメ、ヨッカゴ(各1地点)という回答は地図にはのせてない。また、「○○の次の日」という回答は、Nにしてある。以上、若年層でも同様。)

「翌日」(図11)をみると、得られた語形はかなり多い。中には、LAJで都下では現われていない語形もあるが、そうした語形でも、隣接する秩父地方の言語地図(東京外国語大学日本語学ゼミナール1978 P. 77~78)をみると、分布がみられる。(これらの文献でもみられない語形は、ツマサツテ、ヤリアサツテである。)

「翌々日」(図12)の方は、それにあたる語を所有していない地点が多い。「翌々日」にあたる名づけを持つ地点が少ないのだから当然のことではあるのだが、得られた語形の種類の少ないのも特徴である。

若年層では、全般に得られた語形の種類は少なく、「翌日」では、シアサツテ、ヒアサツテ(元郷、宮町)、ヤノアサツテ(留浦併用、箱根ヶ崎)、ヤネアサツテ(成木、羽田)、ヤマアサツテ(八雲)、「翌々日」

では、シアサツテ、シンアサツテ(八雲)、ヤノアサツテであった。

それでは、この「翌日」と「翌々日」を重ね合わせた地図をみてみることにしよう(図13、図14)。やて始まる語形をヤノアサツテ類、シアサツテとヒアサツテ、スアサツテをシアサツテ類とし、それぞれY、S、そして、サキアサツテを⑤、ツマサツテをT、無回答はNと、略記する。そして、「翌日」—「翌々日」というように示すことにする。

老年層では、南新町の一例を除いて、〈S—Y〉が、23区内にかたまってみられる。特に、山手線の東側、荒川・台東・江東という、現在でいう「下町」は、このタイプで占められており、また、いわゆる「山の手」の世田谷・杉並等にもみられる。関東一円にみられる〈Y—S〉のタイプは、この地図ではちょうど〈S—Y〉をとり囲んで、埼玉県境に位置する常盤台と志茂、そして23区以外に広がっている。〈S—N〉と〈Y—N〉は、その広がりをぬって点在し、わずかの地点で〈S・Y—N〉がみられる。老年にみられるこのような分布の傾向は、LAJのそれと大体合致する。東京都心にみられる〈S—Y〉の分布の解釈については、佐藤亮一(1975)にくわしい。また、板橋・北区と埼玉県とのつながりについては、小沼民江・真田信治(1978)にこの項目がある。

次に若年層の分布をみることにする。こちらは、〈S—N〉のタイプが圧倒的に多くなっている。老年層で〈S—Y〉がかたまっていた荒川、台東、江東といった各区もすっかり〈S—N〉になってしまっている。

図11

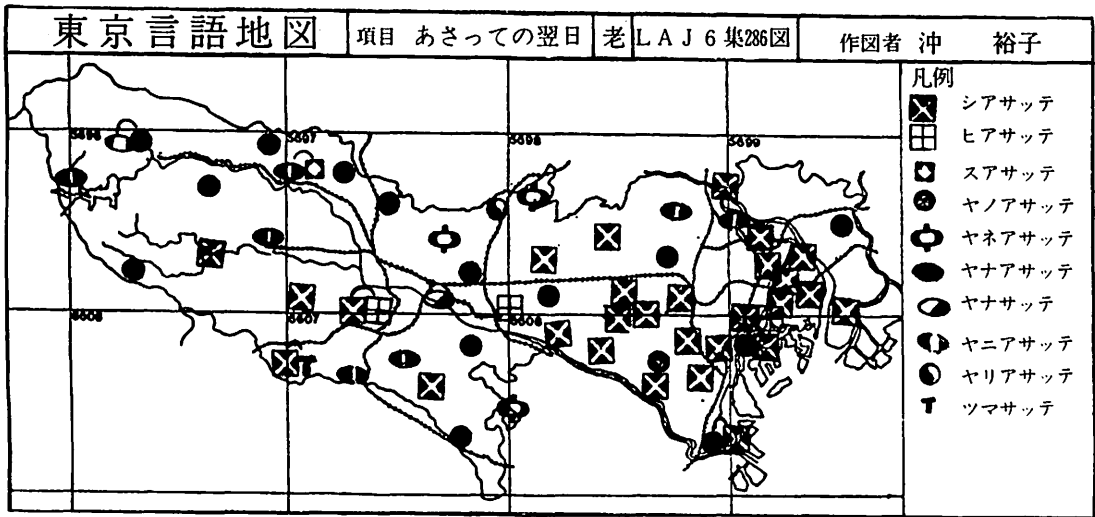
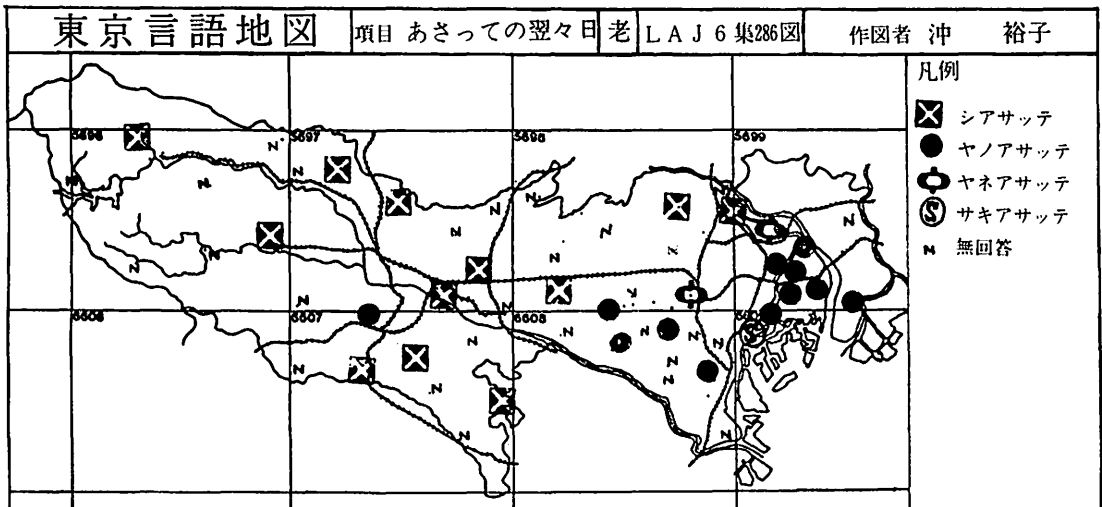


図12



さて、ここで、これら2枚の地図を比較してみたい。地図を比較すると、ふたつの変化に気づく。

ひとつは、「翌々日」が名づけを持たなくなったことである。〈x-y〉から〈x-N〉のタイプへの変化である。この変化は勢力の中心である都心でも起きているので、伝播という点のみから説明することは難しい。

もうひとつの変化は、〈x-N〉のxが、シアサッテ(S)になったことである。こちらは、東京中心部に存在した「翌日」のことを指すシアサッテが周辺へと勢力を拡げたということで説明がつかう。

まず、〈x-y〉から〈x-N〉のタイプへの変化についてであるが、原因はどのように説明できるであろ

うか。次のような事情が推測できるかと思う。

まず、辞書の記述をみてみたい。

辞書では、「しあさって」の共通語の意味が、「翌日」であるということをはっきりしているのに対して、「やのあさって」の記述は辞書によって異なる。たとえば、やのあさって ①しあさっての次の日。明後日の次の日。▷東京でいう。 ②明後日の次の日。しあさって。(『岩波国語辞典』第三版)  
 やのあさって ③しあさっての次の日。④〔方〕あさっての次の日。しあさって。やなあさって。(『新明解国語辞典』第三版)

のごとくである。

共通語では、ともかくシアサッテは「翌日」のこと

を指すというのがはっきりしている。このことは、「翌日」を意味するシアサツテが広がるのに力があつただろうと思う。それに対してヤノアサツテの方は、東京中心部（の老年層）では「翌々日」というはっきりした意味を持っていたとしても、現在、共通語として意味がゆれている。こちらは、勢力拡張のひとつの障害になったことだろう。すなわち、東京中心部の「翌々日」を指すヤノアサツテの伝播の、あるいは、ヤノアサツテという語形の共通語としての普及をさまたげることにつながつただろうと思われる。

さて、このような事情のもとに、「翌日」を意味するシアサツテが、東京中心から周辺へと勢力をまず広げ

ていったのであろう。周辺の〈Y-N〉の地域は、その勢力を受けてYはSと交替する。翌日のことをシアサツテともヤノアサツテとも言っていた地域は、シアサツテが定着する。また、〈Y-S〉の地域でも、東京語という威光を背後にしようとして登場したシアサツテを受け入れて、Sを「翌日」の意味で使い出す。このような変化が強力に起こって、まず「翌日」のことを表わすのにシアサツテを用いるということが定着したのだろう。それと併行して、「翌々日」を意味するヤノアサツテをわずかながら受け入れた（あるいは残した）地域が、今、地図の〈S-Y〉の地域にみられる、と考えられる。

図13

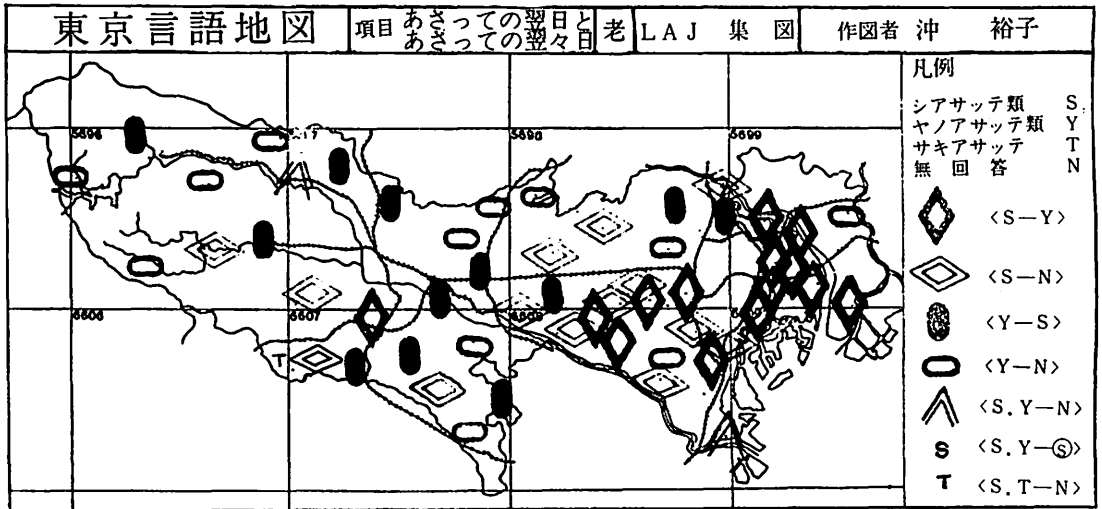


図14

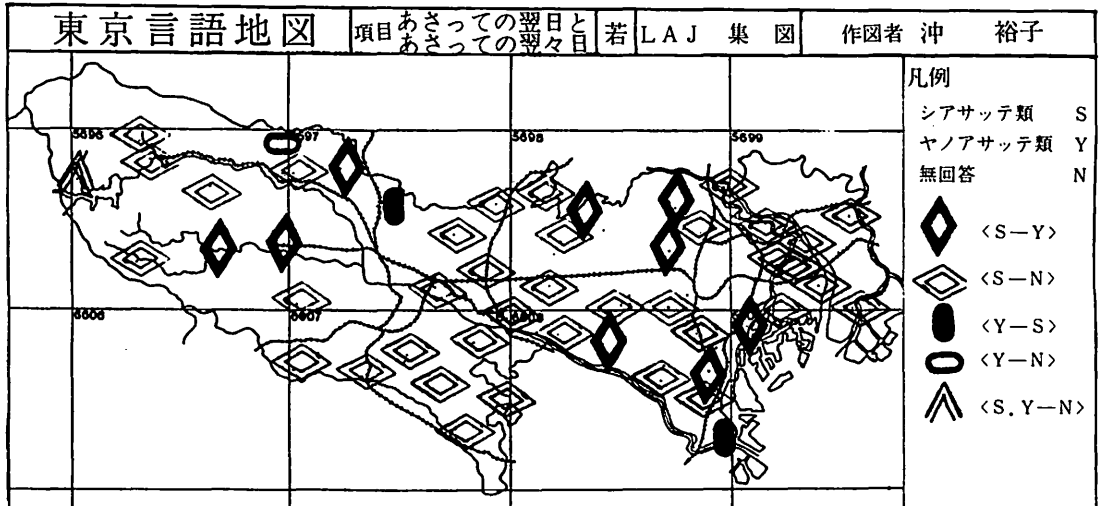


図15

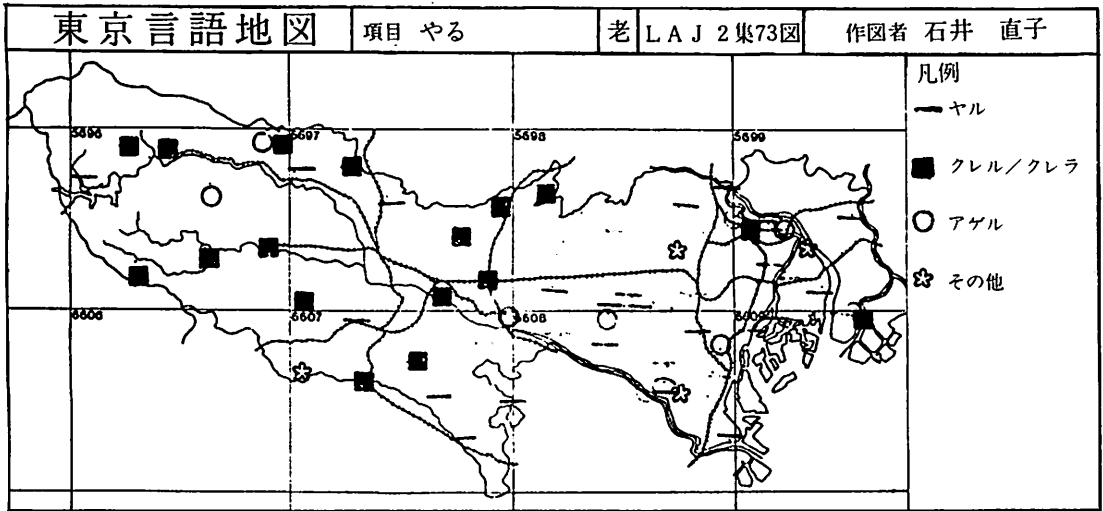
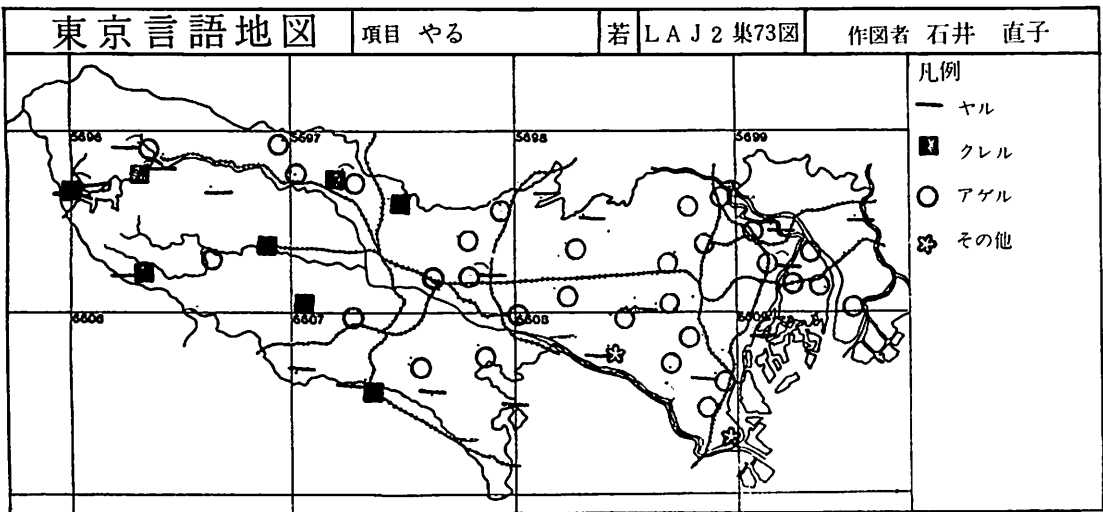


図16



6. やる

この項目ではクレルの衰退とアゲルの進出に注目したい。

なお、質問文は、「ただで与えることを物をどうするといえますか。わたしが友達にたばこを一本どうするといえますか。お金とひきかえなら「売る」というところですが」というものであり、与える対象は友達と限定してある。

まず、クレルの分布を見ると、老年層では西部のかなり広い地域と東の江戸川区・北区にクレル形がある(ただし、江戸川区・北区の2地点はヤルやアゲルとの併用である)。ちょうど都の中心部をとりまくような分布を示しているわけで、古くはクレルが用いられて

いたところへ新しくヤルが入ってきたものと思われる。この時クレル1語でまかっていた意味領域をヤルとクレルの2語が分担したものと思われるが、今回「くれる」を表す語の調査は行っていないのははっきりしたことはいえない。又、クレルが古い語形であることは、老年層と若年層の比較をすることによっても明らかになろう。若年層では、都区内のクレルは姿を消し、西部でもクレル使用地域はずっと狭くなっている。もっとも、そのかわりの語形はヤルではなくアゲルが主に使用されている。

若年層ではアゲルの台頭が著しい。図を作成する際は、「丁寧な言い方」と注のあるものは除いてある。動物にはヤルだが人にはアゲルを用いるという場合はア

ゲルを採った。

クレル・ヤルからアゲルへの変化に地域的な要素はほとんどみられない。この変化は、語の地理的伝播というよりは、いわゆる敬意の通減によってアゲルが通常語としての位置を獲得したためとみることもできよう。ただし、従前の美化語から変化して、アゲルの通

常語としての使用がどれだけ成熟しているかは、更に慎重な調査が必要かもしれない。

なお、「その他」の語形に含まれるのは、アタエル(羽田・若)、メグンデヤル(成城・若)、アゲヨウ(江古田・老)、クレテヤル(南浅川町・老)、ホドコス(奥沢・老)である。

図17

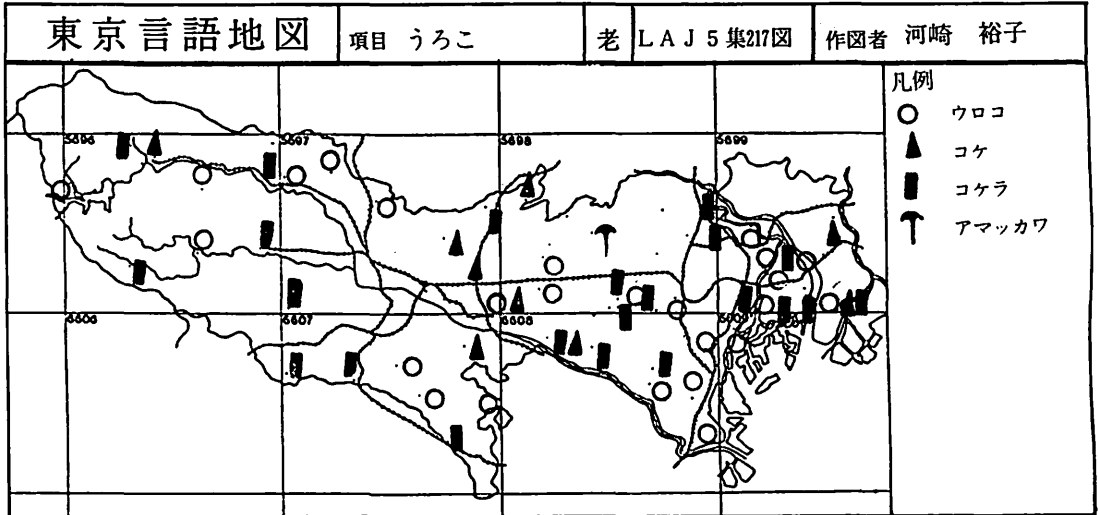
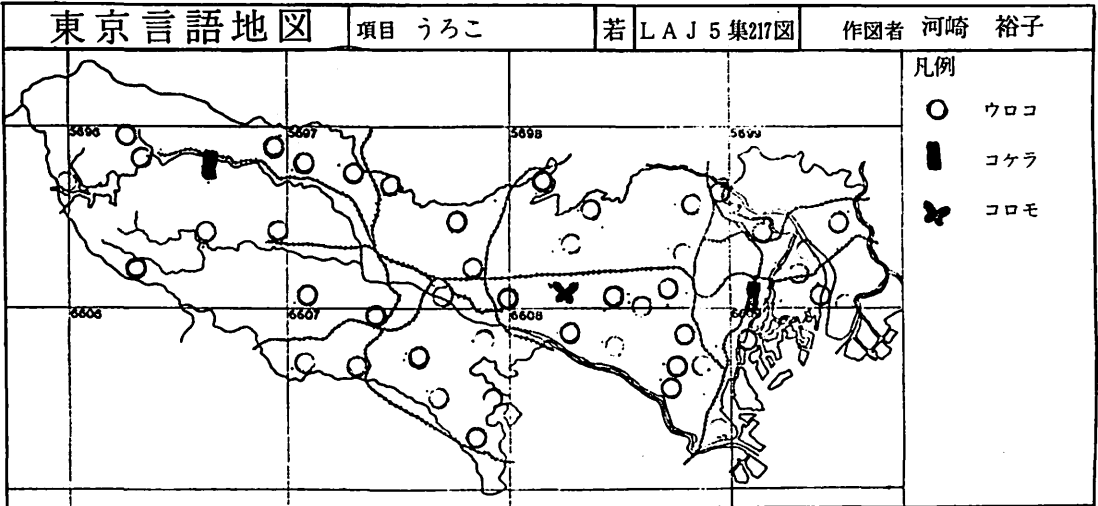


図18



7. うろこ

老年層においては、共通語形のウロコとともに、コケ・コケラの勢力も強く、かなりの地点に分布している。コケラは、東京の両端(東部と西部)にやや多く分布している。一方、若年層では古形と考えられるコケ・コケラという語形は殆ど見られなくなっている。佃と御岳山のわずか2地点にコケが分布しているのみ

である。その他の地域では全て共通語形のウロコが占めている。老若二世代を比較することによって、コケ・コケラから、ウロコへときれいに語形が交替した様子がわかる。世代差がよく現われている地図と言えよう。

コケ・コケラ類は東日本一帯に広い分布が見られる語であるが、このように若年層でほとんど見られなくなったのは、西日本特に近畿方面から入って来たウロ

コが共通語としての扱いは受けるようになり、その勢力を拡大していったためであろう（LAJ解説5巻P.58 参照）。東京の若い世代では、その地位をすっかり確立したと言ってもよからう。東京都だけでなく、

その周辺地域、関東地方でも、ウロコはかなり勢力を持ち、広い範囲に渡って分布しはじめていると推測される。地域を広げて調査を行えば、更によく現在の分布状況ははっきりするであろう。

図19

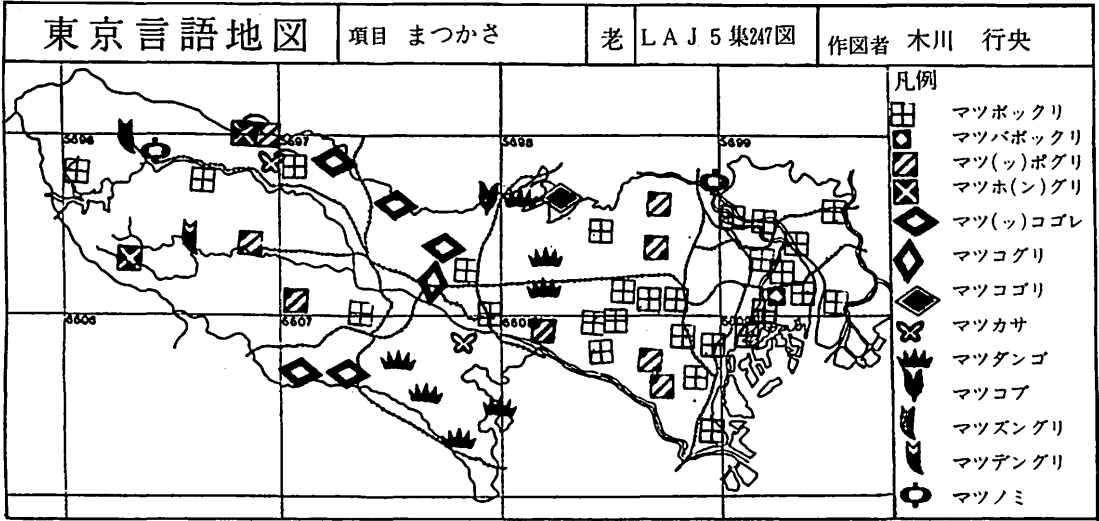
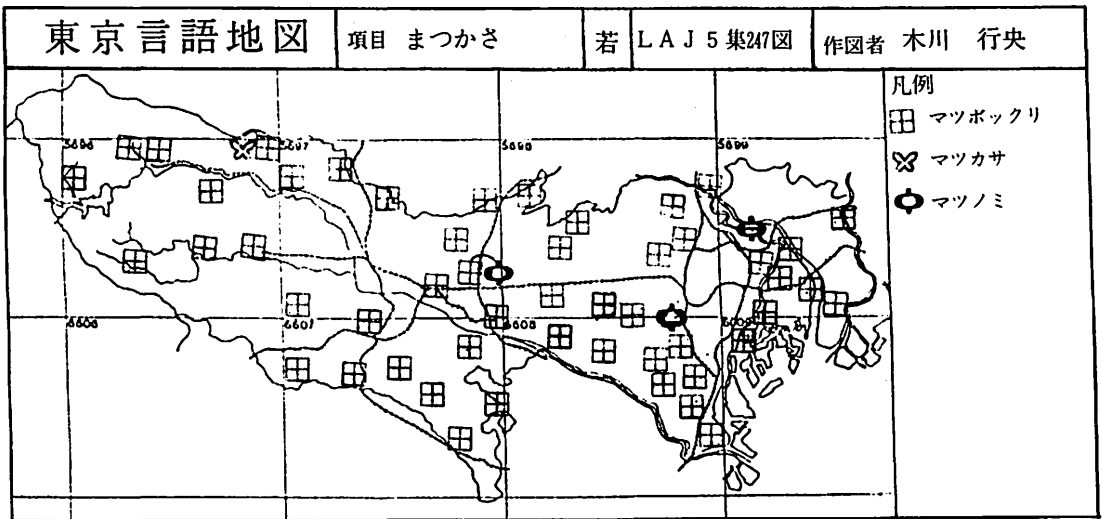


図20



8. まつかさ

語形としては、西からマツズングリ、マツテングリ、マツホ(ン)グリ、マツ(ッ)ポグリが分布し、次にマツコゴレ・マツコグリ・マツコゴリ、マツタンゴの分布がみられ、その東に再びマツ(ッ)ポグリが分布、そして都心にはマツボックリが分布している。その他には、マツカサ、マツノミがそれぞれ2地点ずつ、マツコブが1地点にみられる。

このうち、マツホ(ン)グリ、マツ(ッ)ポグリ、

マツボックリは、「まつふぐり」の変化したものとされる。これらを全て都心からの伝播とするならば、その順序は分布域からみて、マツホ(ン)グリ→マツ(ッ)ポグリ→マツボックリとなる。

ところで、LAJによれば、マツコゴレ・マツコグリ・マツコゴリも、その分布する地域から、マツフリあるいはマツボグリからの音変化あるいはマツコブシなどとの混交ではないかとされる。この地域の状況を見ると、上述のように、マツコゴレなどは、マツボ

グリの分布を中断するような形で分布している。また、混交を考えるならば、久米川には、混交を生じさせるもになった可能性のあるマツコブもみられる。しかし、マツコブは、LAJによれば埼玉県を中心にマツコブシという語がややまとまった分布をみせているが、東京都内の今回の調査では1地点のみである。それに対し、マツコグレの類は埼玉県境から神奈川県境にまで分布しており、都心から伝播したものと考えるならば、当地域におけるマツコグレの類は、マツコブあるいはマツコブシとの混交は考えにくいように思われる。一方、マツコグレの類に隣接してマツダンゴが、や

はり埼玉県境から神奈川県境にわたって分布している。この語は、栃木県・茨城県などにまとまった分布をもっている(LAJ, DAKによる。なおDAKによれば神奈川県にも東京都との県境付近にみられる)。もし、北関東地方からの伝播が考えられるものなら、マツコグレの分布している中にマツダンゴが侵入してきたとも考えられる。さらに、マツコグレの類も東京より北の地域で混交をおこすなり音変化をおこして現在の分布状況が生じたと考えられる。しかし、そう考えるべき積極的な根拠はない。

図21

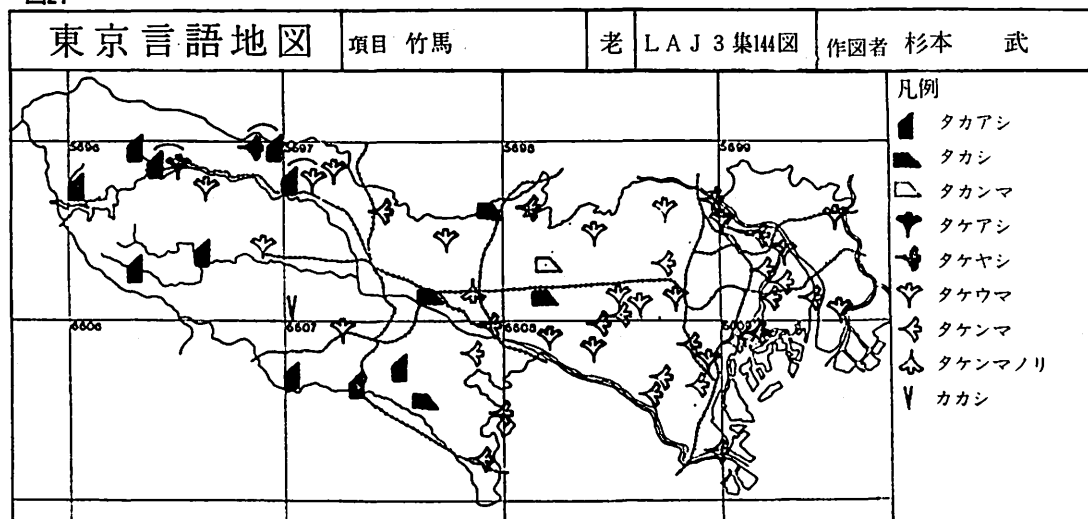
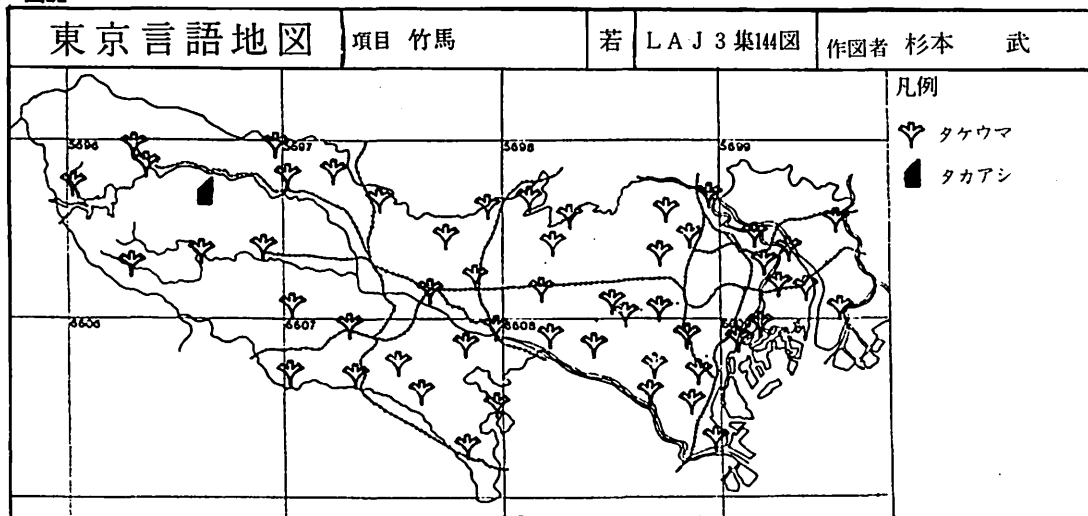


図22



## 9. 竹馬

得られた回答のうち、タカシはタカアシの、タケヤシはタケアシの変化したものと考えられる。さらに、タケマノリは、ものと同行為を混同したという可能性が考えられる。したがって、回答は、タカアシとタカシのタカアシ類、タケアシとタケヤシのタケアシ類、タケウマ、タケマノリ、タケマノリのタケウマ類、タカンマ、カカシに分けられる。

これらの回答のうち、タカンマはタカウマの変化したものと考えられるので、カカシを除くものは全て、前部要素としてのタカ、タケと、後部要素としてのアシ、ウマを組み合わせたものと考えられる。

次に分布をみてみると、まず老年層では、東京都東部にタケウマ類、西部にタカアシ類が分布している。ただし、タケウマ類は、鉄道沿いに西部にも分布している。また、LAJによると、埼玉県、神奈川県においても同様にして、東部にタケウマ類が、西部にタカアシ類が分布している。

さて、東京都・埼玉県・神奈川県においては、西部よりも東部の方が中心であることから、タカアシ類の方が古く、そこにタケウマ類が侵入してきたと考えられる。また、このことは、タカアシ類が茨城県・福島県東部・山形県南部に分布し、その分布がタケウマ類によって分断されていることからもうなずかれる。さらに、若年層では、御岳山の1地点でタカアシがみられる他、全てタケウマになり、共通語化がほぼ完成している。

ところで、老年層では、大氷川と成木でタケアシ類が、向台町でタカンマがみられる。まずタケアシ類の方は、2地点ともタケウマ類の侵入の先端でもあるので、独自に生じた混交の結果であろうかと思われる。これは、2地点とも併用形としてタカアシがあることからもうなずける。次にタカンマである。これについては、LAJ第3巻解説で「タカーの部分には一般には「高」と考えられるが、「竹」を擬することもできるかも知れない(P.87)」と述べられている。今回の調査では、向台町の1地点からしかタカンマ(あるいはタカウマの類)の回答が得られなかったもので、確実なことは言えないが、東京都東部にありながら付近にタカシがみられること、また、安食邦明(1982)によると、埼玉県南部においてもタケウマ類とタカアシ類の境界

にタカウマ類がみられることから、このタカンマも、タカアシ類とタケウマ類の混交の結果ではないかと思われる。

ところで、先にもふれた東京都中部の3地点でみられるタカシであるが、この3地点はタケウマ類の領域に含まれている。ここで注目されるのは、タカアシ類のうちタカシの分布が、上小山田町の1地点を含み、東京都中部に限られていることである。安食邦明(1982)によると、埼玉県所沢市にも、タカアシ類、特にタカシがみられるので、これとつながるものとも考えられる。しかし、このように考えた場合、新しい語形と考えられるタケウマ類の領域の中央に古い語形と考えられるタカアシの変化形であるタカシが貫入していることになり、奇妙である。これをどう解釈するかは今後の問題となる。

最後に、下恩方に1地点みられるカカシである。カカシはLAJではみられないが、「全国方言辞典」によると、神奈川県足柄下郡の報告がある。しかし、これも、神奈川県南西部であるので、つながるものではなさそうである。

安食邦明(1982)「竹馬の日本語史——埼玉県方言・全国諸方言・文献から——」『日本方言研究会第34回研究発表会発表原稿集』

大橋勝男(1974~1976)「関東地方域方言事象分布地図」(全三巻) 桜楓社

国立国語研究所(1966~1974)『日本言語地図』(全六巻) 大蔵省印刷局

小沼民江・真田信治(1978)「大都市東京の北辺における方言分布の実態」『日本方言研究会第26回研究発表会発表原稿集』

佐藤亮一(1975)「言語地図からみた「あさって」と「やのあさって」」『言語生活』284

東京外国語大学日本語学ゼミナール(1978)『秩父地方方言地図』

木川行央・東京都立大学助手  
沖 裕子・同大学院学生  
杉本 武・同大学院学生  
石井直子・同学生  
河崎裕子・成蹊大学学生